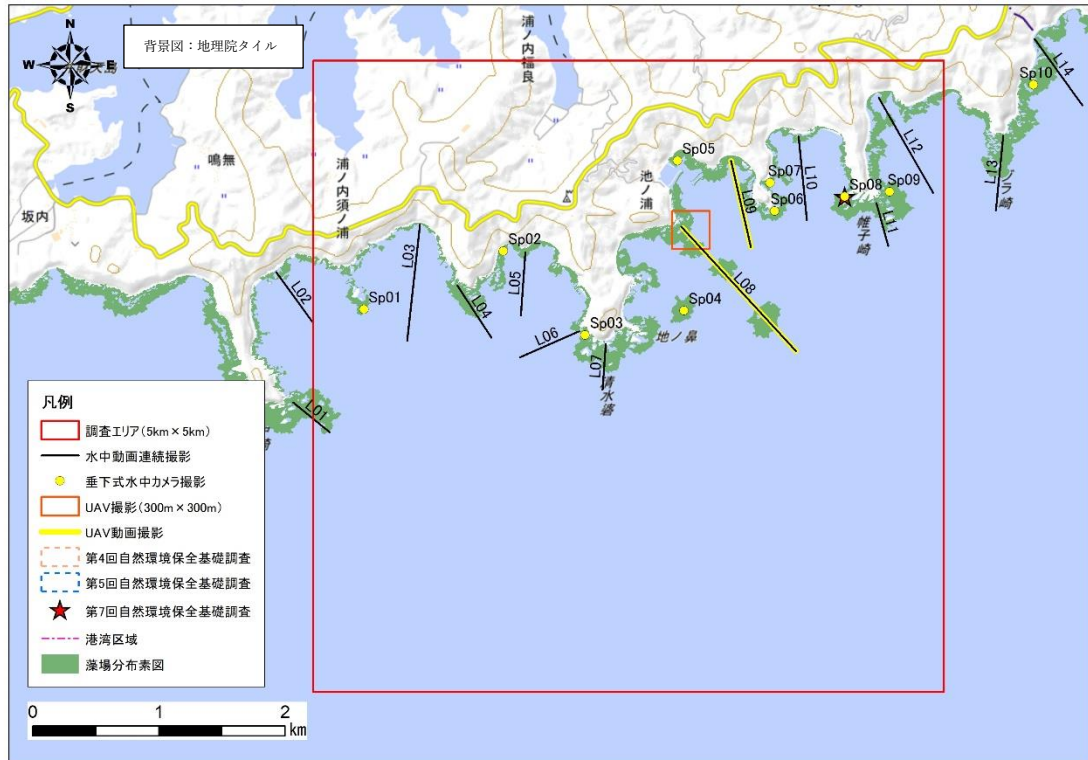


(1) 調査海域名	四国-九州沿岸海区 横瀬沿岸
(2) 調査海域の所在	高知県 須崎市地先
(3) 調査海域及び調査位置図	

【調査位置図】



(4) 調査位置の詳細 (WGS84)

詳細な位置情報は掲載しておりません。詳細な位置情報を希望される場合は、藻場調査ウェブサイトの「現地調査の結果」の「調査結果 (データ)」をご覧ください。

【水中動画連続撮影】

ライン番号	岸側基点		沖側基点		測線長 (m)
	緯度	経度	緯度	経度	
1	-	-	-	-	451
2	-	-	-	-	373
3	-	-	-	-	487
4	-	-	-	-	925
5	-	-	-	-	490
6	-	-	-	-	504
7	-	-	-	-	362
8	-	-	-	-	1,339
9	-	-	-	-	701
10	-	-	-	-	669
11	-	-	-	-	355
12	-	-	-	-	870
13	-	-	-	-	594
16	-	-	-	-	646
測線長 計					8.8km

【垂下式水中カメラ撮影】

スポット 番号	緯度		経度	
1	-	-	-	-
2	-	-	-	-
3	-	-	-	-
4	-	-	-	-
5	-	-	-	-
6	-	-	-	-
7	-	-	-	-
8	-	-	-	-
9	-	-	-	-
10	-	-	-	-

【 UAV 撮影（オーバーラップ撮影範囲）】

撮影範囲	緯度		経度	
A	-	-	-	-
B	-	-	-	-
C	-	-	-	-
D	-	-	-	-

(5) 調査年月日 令和2年12月15日、12月16日 (UAV撮影：12月17日)

(6) 調査実施者 株式会社パスコ 北野武司 (調査責任者)

(7) 調査海域の概要

本海域は土佐湾の中央部に位置しており、太平洋に面した黒潮や台風による高波浪の影響を強く受ける海域である。第4回、第5回および第7回自然環境保全基礎調査において、ガラモ場が確認されており、比較的大きなトゲモク群落が現存しているとされている。

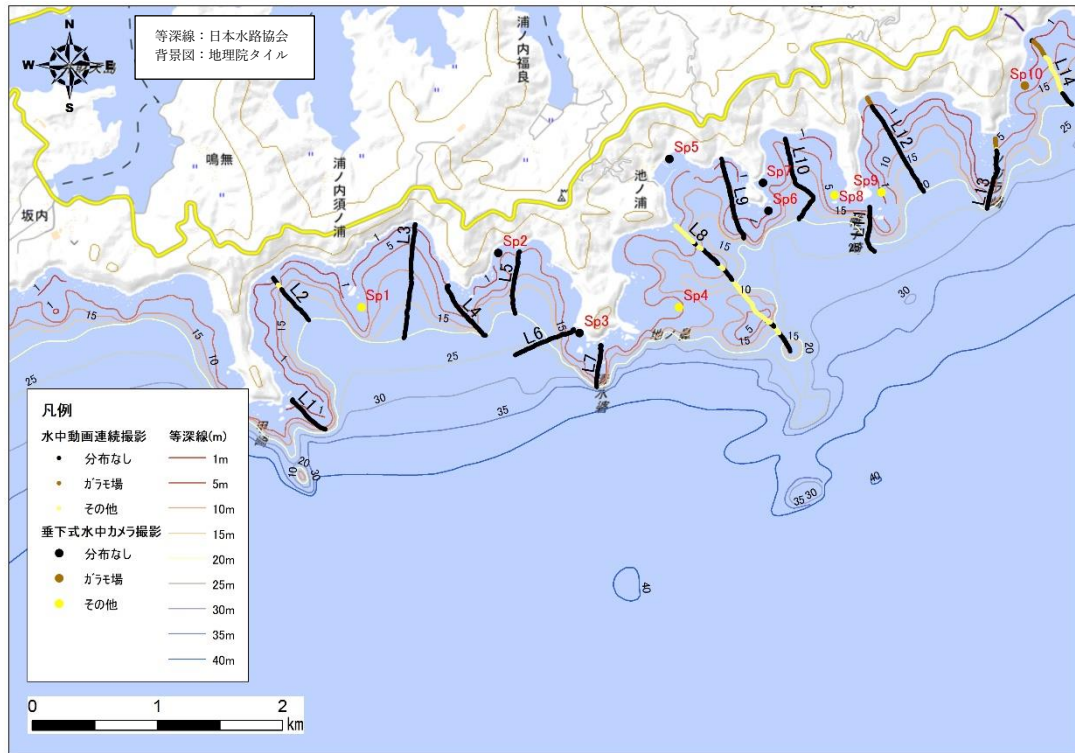
また、本海域を含む土佐横瀬は、生物多様性の観点から重要度の高い海域（沿岸域）に指定されており、太平洋暖海域の代表的なガラモ場とされている。

現地調査は横瀬半島太平洋側に見られる藻場を対象として実施した。

横瀬沿岸での高度100mの年間平均風速は5m/s前後となっている (NeoWins (洋上風況マップ) : NEDO)。

(8) 調査結果 ①水中動画連続撮影

【確認結果平面図】



測線 1：横瀨半島西側の調査測線、水深 D.L-5.7～-29.7m、底質は岩盤に巨礫、礫が混在していた。小型藻類を含めアマモ類、大型褐藻類の分布は確認されなかった。

測線 2：横瀨半島西側の調査測線、水深 D.L-1.3～-22.6m、底質は岸よりの水深 D.L-10m 程度までは岩盤に巨礫、礫が混在し、それ以深は砂に礫が混在していた。一部の岩盤、礫上等に小型藻類が確認されたが、アマモ類、大型褐藻類の分布は確認されなかった。

測線 3：横瀨半島西側の調査測線、水深 D.L-2.0～-20.5m、底質はごく岸よりの水深 D.L-4m 程度まで巨礫、礫等が混在し、それ以深は砂となっていた。小型藻類を含めアマモ類、大型褐藻類の分布は確認されなかった。

測線 4：横瀨半島西側の調査測線、水深 D.L-3.3～-21.9m、底質は主に岩盤に巨礫が混在し、水深 D.L-20m 前後で砂となっていた。小型藻類を含めアマモ類、大型褐藻類の分布は確認されなかった。

測線 5：横瀨半島西側の調査測線、水深 D.L-2.1～-18.4m、底質は岸よりの水深 D.L-12m 程度までは、岩盤に巨礫が混在し、それ以深は砂となっていた。小型藻類を含めアマモ類、大型褐藻類の分布は確認されなかった。

測線 6：横瀨半島西側の調査測線、水深 D.L-6.6～-25.5m の急峻な地形である。底質は主に岩盤、巨礫、礫が混在し、水深 D.L-20m 前後からは砂となっていた。小型藻類を含めアマモ類、大型褐藻類の分布は確認されなかった。

測線 7 : 横濬半島西側の調査測線、水深 D. L-2. 3~-35. 1m の急峻な地形である。底質は主に岩盤であり、巨礫、礫が混在していた。小型藻類を含めアマモ類、大型褐藻類の分布は確認されなかった。

測線 8 : 横濬半島中央の池ノ浦漁港周辺の調査測線、水深 D. L-5. 2~-23. 8m、底質は岩盤、巨礫、礫、砂等が混在し、多様であった。断続的に小型藻類の分布が確認されるが、痕跡程度であった。

測線 9 : 横濬半島中央の池ノ浦漁港周辺の調査測線、水深 D. L-2. 1~-26. 3m、底質は主に礫、砂であった。小型藻類を含めアマモ類、大型褐藻類の分布は確認されなかった。

測線 10 : 横濬半島東側の調査測線、水深 D. L-2. 9~-19. 3m、底質は主に砂であるが、所々岩盤、礫等が露出していた。小型藻類を含めアマモ類、大型褐藻類の分布は確認されなかった。

測線 11 : 横濬半島東側の調査測線、水深 D. L-4. 1~-25. 8m、底質は岸よりでは岩盤、巨礫の混在であるが、水深が深くなるにつれて砂が主体となっていた。小型藻類を含めアマモ類、大型褐藻類の分布は確認されなかった。

測線 12 : 横濬半島東側の調査測線、水深 D. L-3. 2~-19. 6m、底質は主に砂であり、岸から水深 D. L-6m 前後までは礫が混在していた。ごく岸よりの水深 D. L-3m 程度までホンダワラ類が点生で分布していた。

測線 13 : 横濬半島東側の調査測線、水深 D. L-3. 8~-27. 1m、底質は主に岩盤に巨礫が混在していた。ごく岸よりの水深 D. L-3m 程度までホンダワラ類が点生で分布していた。

測線 14 : 横濬半島東側の調査測線、水深 D. L-1. 4~-23. 0m、底質は主に砂、礫である。およそ水深 D. L-1~-3m において、ホンダワラ類が疎生から密生で分布していた。



小型藻類 (測線 8)



ホンダワラ類 (測線 14)

(8) 調査結果 ②垂下式水中カメラ撮影

【垂下式水中カメラ撮影 調査結果一覧】

地点番号	水深 (D. Lm)	底質	主要な藻類 (種名・被度)	備考
Sp1	-9.3	岩盤	小型藻類+	
Sp2	-1.6	岩盤、礫	-	
Sp3	-4.9	岩盤、礫	-	サコウ確認
Sp4	-5.4	岩盤	小型藻類+	
Sp5	-4.8	礫、砂・泥	-	サコウ確認
Sp6	-6.4	岩盤、岩塊・巨礫	-	
Sp7	-2.8	岩塊・巨礫、礫	-	
Sp8	-4.9	岩盤、岩塊・巨礫	小型藻類+	
Sp9	-6.5	岩盤、岩塊・巨礫	小型藻類+	
Sp10	-7.4	岩盤、岩塊・巨礫	ホタテワラ類30%	サコウ確認



サコウ類 (地点5)

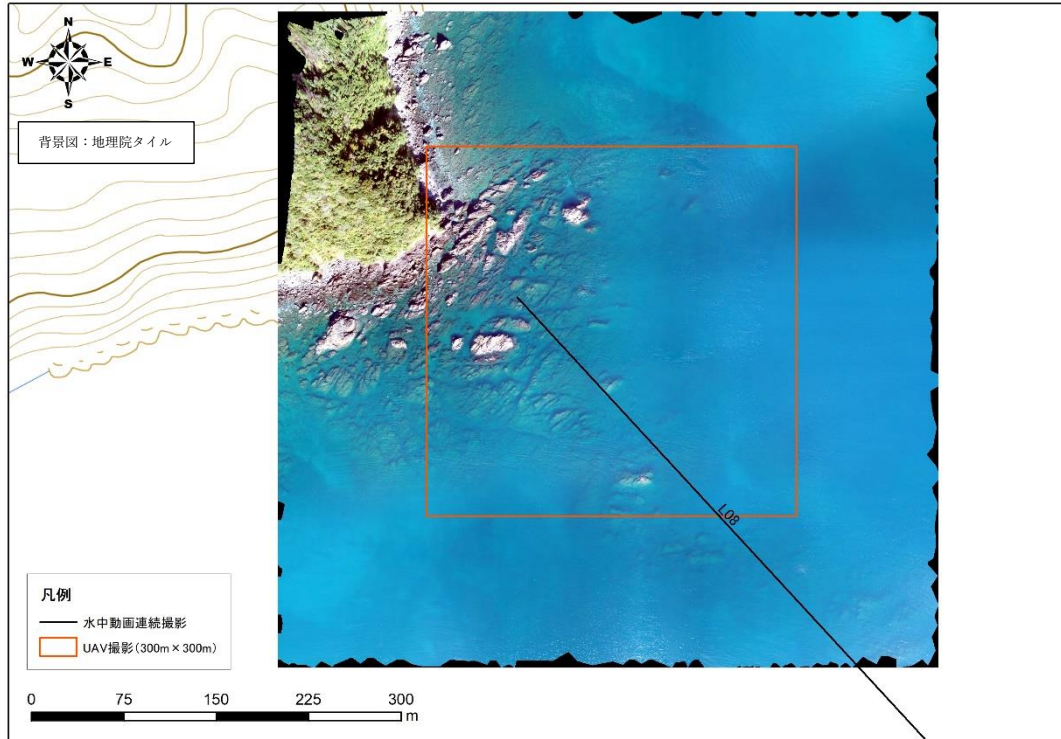


ホタテワラ類 (地点10)

(8) 調査結果 ③UAV 撮影

【UAV 撮影結果 簡易オルソ画像】

簡易オルソ画像からは、撮影範囲 (300×300m) 内に広がっている岩盤の形状は確認できるが、藻場の分布に関しては明確ではない。



撮影時間	潮位※ ¹	風向・風速※ ²	波高	撮影高度	備考
2020/12/17 10:00～11:00	D. L 1.55m	北西 3.0m/s	0.5m 以下	149m	

※¹ 潮位は、気象庁須崎検潮所における 10 時時点の潮位表基準面上の値

※² 風向・風速は、気象庁須崎観測所における 10 時時点の値

(10) まとめ

調査海域は、土佐湾の中央部、横瀬半島の太平洋側に位置し、断崖地形が連続しており海岸は岬と入江が交互に出現する。

調査海域の中央に池ノ浦漁港が位置しており、測線 1～7 の漁港から西方海域では岩盤、礫上に着生するホンダワラ類、小型藻類はほとんどみられず、主にサンゴ類が着生していた。測線 8 の池ノ浦漁港付近では小型藻類がみられるが、測線 10 付近まではホンダワラ類は確認されなかった。

測線 11～14 の調査海域の東方では、岸近くの水深 D.L-3m 付近より浅所、主に礫に着生するホンダワラ類の分布が確認された。

(11) その他特記事項

※ 潮位補正は、気象庁推算潮位の須崎 (SUSAKI) を用いた。